



《ありのまま》に捉える見方。または《中道》ともいう。

(P31・1行/P19・7行)

※『諸法如實の相を觀じ、亦(また)不分別を行ぜざる。是れを菩薩摩訶薩の行處と名く』

(『安樂行品』二四一頁 終二行)

・觀世音菩薩を念ずるとは

(P37・5行/P23・終5行)

《本仏に感応(かんのう)する》 久遠本仏と感応する道をひらくこと。

《觀世音菩薩のようになりたい》 觀世音菩薩のようになりたいという憧れを持つこと。

『觀世音菩薩の名を持つことあらん者は』 (三五七頁 七行)

「觀世音菩薩の名を持つ(たも)つ」⇒ 觀世音菩薩の無限の『智慧』と一体となり、その無限の『慈悲』と一体になるのです。(P53・4行/P34・終2行)

『觀世音菩薩の名を称せば』 (三五八頁 一行)

「觀世音菩薩の名を称(とな)える人」⇒ 真理(妙法)を説く人。衆(しゅう)のなかにおいて『中諦の智慧』に基づいて『人生いかに生きるべきか』を説いて聞かせるならば、人々は魔に魅せられたりする危機から救われるのであります。(P68・終4行/P45・7行)

・火難 ① 煩惱の炎— 火というものは、～ 煩惱の炎。(P53・終3行/P35・3行)

・水難 ② 人は欲に溺(おほ)れる。誘惑に押し流されるのです。サンズイ「シ」に「弱い」と書いて「溺・でき」。溺れる。(P63・終5行/P41・終5行)

・風難 ③ (人生の目的を見失う) これを風難という。(P66・終2行/P44・3行)

・劍難 ④ 心を切られる— 憎悪(そうお)に切られ、嫉妬(しと)に切られ、侮辱(ぶじょく)に切られ、猜疑(さいぎ)に切られて、己の心を傷つけないかが問題。大慈・大悲と真実の智慧とに心をかよわせ、一心にそれを念ずれば、心が傷つけられることはありません。なぜならば、真実の智慧より強いものは無いからです。(P69・終3行/P46・4行)

・鬼難 ⑤ 邪悪なものにとりつかれて、自分を見失う— 正気を失う人。誤った信仰に入って中道を踏みはずす人。よこしまな思想にかたられて極端に走る人。(P73・終5行/P49・2行)

・獄難 ⑥ これは「心の自由を束縛するもの」。おおかたの人間が心の自由を獲得することを忘れています。そして自分で自分を縛っているのです。金のある者は金に縛られ、地位のある者は地位に縛られ、名誉のある者は名誉に縛られ、本当の人間らしい行ないを知らず知らずのうちに自分で抑えつけているのです。(P76・2行/P51・1行)

・罪は包み 罪という言葉は、(つつみ=包み)から転化。仏性を迷いによって包んでしまうことを(つつみ)というのです。真実の智慧に帰依しさえすれば、内から自分を縛っていたあらゆる迷いも、外から自分を縛っていた世間の悪条件も、即座に消えてなくなってしまう。(P80・2行/P53・終5行)

・賊難 ⑦ 人生行路の上に現われる様々な「苦難」をいいます。「中諦(一切の出来事をありのままに捉える)の觀(み)かたに心を向けなさい」という意味です。そうすれば、今起きている苦難などは、いわば大海に表面に立つさざ波のようなものだということが、ひとりでに分かってきます。(P85・3行/P57・7行)

・苦難は海面の波のようなもの 「苦難」などというものも、それに直面している人にはそれが実在するもののように感じ取られるために、恐れおののくのですけれども、じつは海の波と同じで、実体はないのです。あるように見えるのは、因と縁が合ってそういう現象が現われているにすぎないのだから、やがてその因縁が無くなれば、消え去ってしまうものだ。(こういうふうに達観できれば、恐怖などはどこかへ吹っ

飛んでいくわけです) (P87・3行/P58・終4行)

- ・貪 欲望をつい貪欲にまで増大させるから、自らも悩み、人をも不幸にし、世の秩序をも乱すことになるのです。 (P90・3行/P61・2行)
- ・瞋 小我のために怒る、小さな怒りです。我にとらわれているために怒るのです。 (P93・3行/P63・4行)
- ・痴 愚痴というのは愚かなこと。〈**本当の意味の智慧がないもの**〉という意味。 (P98・終4行/P67・1行)
- ・愚痴の人とは「愚痴」というのは、**「真理を知らず」、「知ろうともしない」**ことを言います。**自分の立場がわからず、あとさきの考えもない愚かさ**を言います。 (P99・終3行/P67・終4行)

「愚痴の人間」とは—

(P185・5行/P131・終3行)

- ①自分のすることが**どんな結果を生み、周囲にどんな影響を及ぼすかを、考えようとし**ない人間。
- ②自分がこの世の中で**どんな位置を占め、どんな役目を持っているのか、それがわから**ない人間です。
- ③人を愛し、人と調和することの快(こころよ)さ、**その喜びを知らない**人間。

したがって、**この反対の人間が、本当の意味で〈智慧のある人間〉**というものです。

『便ち福德・智慧の男を生まん』 (三五九頁 終三行)

『便ち端正有相の女の宿徳本を植えて衆人に愛敬せらるるを生まん』 (三五九頁 終二行)

- ・〈男〉は智慧の象徴 (P104・終4行/P71・5行)      ・〈女〉は慈悲の象徴 (P106・6行/P72・終4行)
- ・二求両願をかなえる 〈男〉の子が欲しいと願うならば、**福德円満・豊かな人格の感化力・智慧を具えた男子**とあり、〈女〉の子を願うと、**顔立ちが美しく(身なりが整い)、そして前世において積んだ徳分によって多くの人々から愛され敬われ、そして慈悲深い女の子を生む**であります。 (これを見方を変えて言うならば、**「最高の男性」とは、福德円満で・豊かな人格の感化力・智慧(本能の衝動にかられない)を具えた人であり、「最高の女性」とは、顔立ちが美しく、多くの人々から愛され敬われ、そして慈悲深い人**を指し示しているといえます) (P109・1行/P74・4行)
- ・三十三身 観世音菩薩は、〈三聖身さんしょうしん〉・〈六天身ろくてんしん〉・〈五人身ごにんしん〉・〈四部衆身しぶしゅしん〉・〈四婦女身しぶによしん〉・〈二童身にどうしん〉・〈八部身はちぶしん〉・〈執金剛身しゅうこんごうしん〉という三十三種の身となって現われ、あらゆる衆生を教化するというのです。 (P126・6行/P89・5行)
- ・普門示現 (P126・終2行/P89・終5行)  
それぞれの人を救うためには、それぞれの人にふさわしい身となって示現されることを**【普門示現】**と  
いいます。**【大悲代受苦・だいひ だいじゅく】**と共に、観世音菩薩が持つ二つの大きな徳の一つ。
- ・施無畏者 **真実の智慧**を知れば、恐れるものはなくなってしまいます。**真実の智慧に随順すれば、危機に際しても動揺することはない**のです。 (P133・終2行/P94・終5行)
- ・大悲代受苦 **すべての衆生の苦しみを一切引き受けようという願い**。この世にただの一人でも苦しみ悩む者がいる限り、**自分は成仏しないという、自己犠牲に徹した精神**。 (P168・1行/P119・8行)
- ・観世音菩薩と一体となる 観世音菩薩と一体となれば、その本体である〈中諦・ちゅうたい〉でものごとを観(み)ることができるようになります。具体的にいうならば、凡夫の身ながらも**①宇宙の根本道理**を悟り、**②すべての人が平等に持っている仏性の尊厳さ**を見出し、しかも、**③その一人ひとりの個性と立場に即した、理解と愛情に満ちた態度**で接していくことができるわけです。つまり、**自分が観世音菩薩になるわけ**であります。 (P194・終行/P138・8行)

『衆生困厄を被って 無量の苦身を逼めん 観音妙智の力 能く世間の苦を救う』

(三六五頁 終四行/【経典】二八頁 二行)

- ・はねかえす力 智慧がフツと湧いてくるならば、その苦しみをたちまちはね返すことができます。『智慧』ある人ははね返すことができます。気力の充実した人は、はね返すことができます。そこに『信仰』のありがたさがあるのです。(P221・終3行/P157・終3行)
- ・苦難を成長の糧とする 苦難をはね返すことのできる人は、その苦難から何ものかをつかむことができます。その苦難を成長の糧(かて)として、人間的に伸びていくことができます。人生の妙味(みょうみ)があるのです。(P223・終2行/P159・2行)
- ・苦が苦でなくなる この『苦が苦でなくなる』ということが、観世音菩薩の本体である『中諦を知る』功德の、最も著(いちじる)しいものであるということができす。『信仰の功德』の一番現実的なものということができるのです。(P231・終4行/P164・7行)
- ・苦のつきるときはない 一体どうすればよいのでしょうか。道はただ一つしかありません。苦を苦としないようにすればよいのです。(P233・4行/P165・8行)  
 《第一》に、『人生は苦である』(苦が常態である)と悟ること。  
 《第二》に、『苦という実体はないのだ』と見極めること。これは《第一》の「人生は苦である」の悟りより、もうひとつ境地の進んだ悟りです。この世は全て『空』。すべからく『原因』と、それを助長する条件である『縁』との結びつきで、『現象』として現われるもの。実体はないものです。
- ・創造活動によって苦を超える すべての人が、今からすぐ実行できる、大乘的な救いの道があるのです。それは『創造活動によって一切の苦を超えてしまう』ということです。(P240・5行/P170・2行)
- ・ひとの幸福への奉仕は最高の創造活動 他の人のしあわせを作るために何らかの活動をするならば、これが最高の創造活動です。～ 心から人のため世のための奉仕活動に打ち込む人は、苦の中にあって苦を知らず、常に喜びに満ち、最高の価値ある人間として生きることができるのです。その人自身が観世音菩薩になったわけでありす。(P242・終4行/P171・終5行)
- ・五 観 真観 ⇒ 清浄観 ⇒ 广大智慧観 ⇒ 悲観 ⇒ 慈観  
 この五観はそれぞれ独立したものではなく、真観から清浄観へ、清浄観から广大智慧観へと、必然的な筋道の通った、一貫した世界観・人生観です。(P246・1行/P174・1行)  
 『無垢清浄の光あって慧日諸の闇を破し 能く災の風火を伏して 普く明かに世間を照らす』  
 (三六六頁 二行)  
 『悲體の戒雷震のごとく 慈意の妙大雲のごとく 甘露の法雨を澍ぎ煩惱(ぼんのう)の焰を滅除す』  
 (三六六頁 三行)
- ・悲に発した戒め 観世音菩薩の戒めは、ひたすら人間の苦しみを取り除いてあげたいという<悲>の心に発しているのです。<悲>が体(すかた)となってあらわれた<戒(かい)>です。それが<悲體の戒・ひたいのかい>の意味です。(P254・5行/P180・1行)
- ・五妙音 (P261・終3行/P185・7行)  
 『妙音観世音梵音海潮音 勝彼世間音あり 是の故に須らく常に念ずべし』 (三六六頁 六行)  
 観世音菩薩は真理(妙音)を説く人であり、世の人間の願い(観世音)を明らかに聞き分ける人であり、その教えは清らか(梵音)であり、そこに説かれる教えはあたかも海鳴りのように人々の胸に染み入り(海潮音)、その教えは、世間の全ての迷いと苦しみを打ち負かして(勝彼世間音)くれるものであります。
- ・名を持つことあらん者は 『観世音菩薩の名を持つ(たも)つことあらん者』。この<聞く>⇒<称する>⇒<持

つ・たもつ)ということには、信仰の深まって行く順序が示されています。①仏教の教えを(聞く)のが、信仰に入る第一歩です。その教えを②一心に、身と心にしみこませる行。(一心称名・いっしんしょうみょう)するのです。これによってはじめて、仏・菩薩の徳と一体になることができるのです。こうして③その境地をいつも持ち続けるように精進する。それが(持つ・たもつ)です。(P268・1行/P189・終3行)  
『慈眼をもって衆生を視る 福聚の海無量なり』 (三六六頁 八行)

#### ・観世音菩薩と一体になる

第一に、我々自身が「観世音菩薩」にならなければならない。観世音菩薩と一体になる。

第二に、指導的立場に立つ者は、観世音菩薩のように人々の心の声を洞察し、その人にふさわしい進路を発見して、自由自在に指導できる。

第三に、苦しみ悩んでいる相手の身代わりになるほどの徹底的な慈悲心を持つこと。

第四に、観世音菩薩は、平和な、包容力に満ちた優しく、温かい人格の象徴。如何なる困難・争い・邪心もたちまち消え去って行くことができる。

第五に、観世音菩薩の智慧・徳・神通力を持った境地は、我々の目標。そのためには釈尊の教え・妙法にしたがって、怠けることなく、退転することなく、修行精進する。(P274・終4行/P195・2行)



### <陀羅尼品のあらすじ>

#### 【薬王菩薩が、法華経を受持し『五種法師の行』を実践する功德を質問】——

【三六七頁 一行】『観世音菩薩普門品』を拝聴した八万四千にのぼる聴衆が、仏の智慧を願う誓いを立てると、薬王菩薩は座から立ち上がり、恭(うやうや)しく右の肩をあらわにして(古代インドの風習 / 相手を讃嘆し敬意を表す作法)、仏さまに合掌して申し上げました。

【三六七頁 二行】「世尊よ。お伺い申し上げます。もし善男子・善女人がこの法華経を受持・読・誦・解説・書写という『五種法師の行』を行ったとするならば、どのような功德を得ることができるのでございましょうか。お教え願います」

#### 【釈尊が薬王菩薩の問いに答える】——

【三六七頁 四行】すると釈迦牟尼仏は、薬王菩薩に仰せになりました。

「もし善男子・善女人が、ガンジス河の砂の数の八百万億那由他(なゆた)倍という計り知れない数の諸仏を供養したとしましょう。そなたはどう思いますか。その者が得る功德というものは多いと思いますか、少ないと思いますか」

【三六七頁 六行】薬王菩薩は即座にお答えしました。

「世尊よ。もちろん多いものと存じます」

【三六七頁 六行】それを受け、釈迦牟尼仏は仰せになりました。

『乃至(ないし)一四句偈(いっしゅげ)を受持し、讀誦し解義(げぎ)し説の如く修行せん、功德甚(はなは)だ』

多し』 「ところが、法華經の中の短い偈(げ)、たとえば四行で構成される『四句偈(しくげ)』をたった一つでも受持し、その教えの通りに実践するならば、その人の得る功德というものは、先の無数の仏を供養する功德よりも計り知れなく大きいのであります」

【『五種法師の行』の尊さに感動した薬王菩薩が、  
法華經を受持し、実践する者を守護することを決意。神呪(じんしゅ)を説く】——

【三六七頁 終三行】それを伺った薬王菩薩は、感激して釈迦牟尼仏に申し上げました。

「世尊よ。法華經を受持し、実践することの尊さがわかりました。／(『我今當(われいままき)に説法者に陀羅尼呪(だらしゅ)を与えて、以て之(これ)を守護すべし』) 私は今こそ、法華經の実践者を守護するために『総持真言(そうじ しんごん/あらゆる善を進め、あらゆる悪を止める神秘の言葉)』を贈りたいと存じます」

【三六七頁 終二行】そして薬王菩薩は、神呪(じんしゅ)を唱えはじめました。

【三六七頁 終行】／【經典裏 八頁 二行・四八頁 二行】「安爾(あん/不可思議よ) – 曼爾(まん/思惟よ) – 摩禰(まね/念することよ)  
三 ～ 惡叉治多治(あしやたや/教えに対する理解よ) 四十一 阿婆盧(あばろ/尽きることのない教えよ) 四十二 阿摩若 那多夜(あまにや なたや/願慮・こりよ することなく、法に従う自由自在の境地よ) 四十三」

【三六八頁 七行】この神呪(じんしゅ)を唱え終わると、薬王菩薩は申し上げました。

「世尊よ。この総持真言(そうじ しんごん)は、ガンジス河の砂の数の六十二億倍という無数の諸仏が説かれたものです。／(『若(も)し此の法師を侵毀(しんき)することあらん者は、則(すなわ)ち爲(こ)れ是(こ)の諸佛を侵毀(しんき)し已(おわ)れるなり』) それゆえこの神呪に護(まも)られている法師を迫害する者がいるならば、その者は全ての仏を敵にして害を加えることと同じで、大きな過(あま)ちを犯すこととなります」

【薬王菩薩の決意を釈尊が讚歎】——

【三六八頁 終五行】すると釈迦牟尼仏は、薬王菩薩をお褒(ほ)めになられました。

「善いかな。善いかな。薬王よ。法華經を受持し、実践し、教えを広める者の身を案じて、それらの者たちを守護する神呪(じんしゅ)・総持真言をよくぞ唱えてくれました。／(『諸(もろもろ)の衆生に於(おい)て饒益(にょうやく)する所多からん』) これによって必ずや、多くの衆生は豊かな利益(りやく)を得ることになるでしょう」

【勇施(ゆうぜ)菩薩が、法華經の実践者を守護する決意。神呪(じんしゅ)を説く】——

【三六八頁 終二行】すると、勇施(ゆうぜ)菩薩が釈迦牟尼仏に申し上げました。

「世尊よ。私も法華經を受持・読誦する人たちを守護するために、神呪(じんしゅ)・総持真言(そうじ しんごん)を唱えさせて頂きたいと存じます。そして法師(法を説き、実践する者)がこの総持真言を得ることで、夜叉(やしや) や羅刹(らせつ)、富单那(ふたんな)、吉蔗(きっしゃ)、鳩槃荼(くはんだ)、餓鬼(がき)などの鬼が、／(『其(そ)の短(たん)を伺(うかが)い求むとも能(よ)く便(たより)を得(い)ることなけん』)法師の弱点に付け込もうとしても弱点をみつけられず、結局は何も着手することが出来ずに、鬼たちはあきらめてしまうこととなります」

【三六九頁 二行】そして、釈迦牟尼仏の前で神呪(じんしゅ)を唱えました。

【三六九頁 四行】/【經典裏 九頁 二行・四九頁 二行】「座隸(ざれ/光る炎よ) – 魔訶座隸(まかざれ/大なる光の炎よ) = 有林只(うつき/智慧の光明よ) = ～ 旨緻梶(しちに/永住よ) + 涅隸墀梶(ねれちに/迎合しないことよ) + 涅隸墀婆底(ねりちはち/無意味にあつまることがないことよ) +<sub>三</sub>」

勇施(ゆうぜ)菩薩はさらに申し上げました。

【三六九頁 六行】「世尊よ。この神呪(じんしゆ)・総持真言は、ガンジス河の砂の数ほどの無数の諸仏がお説きになったものであり、大なる歓喜によって発せられたものです。ですからこの神呪に護られている者に迫害を加えるならば、/ 『則(すなわ)ち爲(こ)れ是(こ)の諸佛を侵毀(しんき)し已(おわ)れるなり』 それは全ての仏に害を加えることと同じ大罪を犯すことになります」

【毘(毗)沙門天王(びしゃもんてんのう)が、法華經実践者を守護する神呪(じんしゆ)を説く】——

【三六九頁 終五行】その時、毘(毗)沙門天王(びしゃもんてんのう)が仏さまに申し上げました。

「世尊よ。私も衆生を愍(あ)れみ、法華經を説き弘める法師を守護するために神呪(じんしゆ)・総持真言を説かせていただきます。

【三六九頁 終四行】そして神呪を奏上しました。

【三六九頁 終二行】/【經典裏 九頁 四行・四九頁 四行】「阿梨(あり/富裕よ) – 霸梨(なり/踊る者よ) = ～ 那履(なび/貧者よ)  
五 拘那履(くなび/全てを富ますことはおかぬ女神よ) 六」

神呪を説き終え、毘(毗)沙門天王(びしゃもんてんのう)が申し上げました。

【三六九頁 終行】「世尊よ。この総持真言(そうじ しんごん)は、法華經を説き弘める法師を守護するものです。そして私自身もまた、/ 『百由旬(ゆじゆん)の内に 諸(もろもろ)の衰患(すいげん)なからしむべし』 その法師(法を説き、実践する者)が住む百由旬(ゆじゆん・約800km/一由旬は井が一日掛ける距離 二里約8km。まは井の声が届く距離1kmの8倍)以内の範囲内で一切の障(さわ)りがないように守護いたします」

【持国天王(じこくてんのう)が、法華經の実践者を守護する決意。神呪(じんしゆ)を説く】——

【三七〇頁 二行】その時、千万億那由他(なめた)という計り知れない数の乾闥婆(けんたつば/鬼神)たちに取り囲まれていた持国天王(じこくてんのう)が、仏さまの御前(おんまえ)に進み出て恭(うやうや)しく合掌し、礼拝して次のように申し上げました。

「世尊よ。私もまたこの神呪・総持真言を唱え、法華經を説き弘める法師を守護いたします」

【三七〇頁 四行】そして神呪(じんしゆ)を奏上しました。

【三七〇頁 五行】/【經典裏 九頁 終三行・四九頁 終三行】「阿伽訶爾(あきゃね/無数の) – 伽訶爾(きゃね/有数福女神よ) = ～ 浮楼莎梶(ぶろしゃに/順次説かれて行くことよ) 八 頰底(あち/真理よ) 五」

【三七〇頁 六行】「世尊よ。この総持真言は四十二億の諸仏がお説きになったものです。もしこの神呪(じんしゆ)に護られた法師を脅(おびや)かす者がいたならば、/ 『則(すなわ)ち爲(こ)れ是(こ)の諸佛を侵毀(しんき)し已(おわ)れるなり』 その者はすべての仏を害する大罪を犯すことになります」

【十人の羅刹女(らせつによ)と鬼子母神(きしもじん)が、

法華經実践者を守護する神呪(じんしゆ)を説く】——

【三七〇頁 終五行】その時、法会の中に数多くの羅刹女(らせつによ/鬼女の意味)たちがいました。第一は藍

婆(らんば)、第二に毗藍婆(びらんば)、第三は曲齒(くし)、第四は華齒(けし)、第五に黒齒(くし)、第六は多髮(たほつ)、第七に無厭足(むえんぞく)、第八は持瓔珞(じようらく)、第九に臯諦(こうたい)、第十には奪一切衆生精氣(だついつさいしゅじょうしゆく)という名の鬼女がいました」

【三七〇頁 終三行】この十人の羅刹女(らせつによ)は、鬼子母(きしも)とその子たち、そして多くの家来たちと共に仏さまの御前(おんまえ)に罷(まか)り出て、声をそろえて申し上げました。

【三七〇頁 終行】「世尊よ。法華經を讀誦・受持する者を守護し、あらゆる障(さわ)りがないように、私どももまた擁護(ようご)させていただきたいと存じます。／『若(も)し法師の短(たん)を伺(うかが)い求むる者ありとも、便(たより)を得ざらしめん』もし法師(法を説き、実践する者)を陷(おとし)れ、欠点をあげつらおうとする者がいたならば、その者たちが着手できぬよう、手掛かりすら見つけられないように致します」

【三七一頁 一行】そして仏さまの御前(おんまえ)で神呪(じんしゆ)・総持真言を唱えたのでした。

【三七〇頁 三行】／經典裏 九頁 終二行・四九頁 終二行「伊提履(いでび/これに於いて) – 伊提民(いでびん/ここに於いて) – 伊提履(いでび/これに於いて) ≡ ~ 多醯(たけ/しかも立つ) + 兇醯(とけ/害を加えず教をよく護持し) + 兇醯(とけ/害を加えるものはない) + 九」

羅刹女(らせつによ)たちは言葉を続けます。

【三七一頁 五行】／經典裏 一〇頁 二行・五〇頁 二行 『寧(むし)ろ我が頭(こゝ)の上に上(のぼ)るとも法師を惱(なや)すことなかれ。若(も)しは夜叉(やしや)、若しは羅刹(らせつ)』もし何者かが私たちの頭の上に乗ることがあっても、それを忍びましょう。しかし法華經を説く人を悩ますことだけは絶対に許しません。夜叉(やしや)でも、羅刹(らせつ)でも、餓鬼(がき)でも、富单那(ふたんな)でも、吉蔗(きっしゃ)でも、毗陀羅(びだら)でも、犍駄(けんた)でも、烏摩勒伽(うまろぎや)でも、阿跋摩羅(あばつまら)でも、夜叉吉蔗(やしやきっしゃ)でも、人吉蔗(にんきっしゃ)でも、そのような鬼どもが法師に憑(と)りつき、熱病に罹(かか)らせ、一日、二日、三日、四日ないし七日、または常時、熱病に苦しませようとしても、それを阻止し、守護します。また、その鬼たちが男の形や女の形になり、童子や童女の形となって法師の修行を妨(さまた)げ、／『乃至(ない)夢の中にも亦復(またまた)惱(なや)すことなかれ』あるいは夢に出て悩ませようとしても、それを阻止し、守護します」

【三七一頁 終三行】／經典裏 十一頁 三行・五一頁 三行そして羅刹女(らせつによ)たちは、偈(け)を用いて釈迦牟尼仏に申し上げました。

### 【法華經の実践者を悩乱する罪の深さを、羅刹女(らせつによ)らが示す】――

【(偈)三七一頁 終行】／經典裏 十一頁 四行・五一頁 四行 『説法者を惱亂(のうらん)せば頭(こゝ)破れて七分になること阿梨樹(ありじゆ)の枝の如くならん父母を殺(しい)する罪 ~ 亦油(またあぶら)を壓(お)す殃(つみ)斗秤(としよう)をもって人を欺誑(ごおう)し調達(ちようだつ)が破僧罪(はそうざい)の如く此の法師を犯さん者は當(まき)に是(かく)の如き殃(つみ)を獲(う)べし』「この神呪(じんしゆ)・総持真言に背(そむ)いて、法華經を説き、実践する人を悩ます者はその罰(ばつ)として、地に落ちると枝が七分八裂(しちぶんはちれつ)に細かく割れる阿梨樹(ありじゆ)の枝のように、頭がバラバラに碎(くだ)けるであります。法の実践者を悩ますこの罪は、両親を殺す大罪と同じであり、油を搾(しぼ)り出す時、石臼(いしうす)にはびこる無数の虫たちを殺しながら石臼を引く罪、または、人を悩まし、

猜疑心(さいぎしん)を起こさせてしまう秤(はかり)や計算をごまかす罪、そして提婆達多(だいばだつた)が釈尊を殺害しようとして釈尊教団の和合を乱(みだ)した罪と同じ大罪にあたります。法の実践者を害する者は、この大罪を犯し、その罰(ばつ)を自ら受けることになるでしょう」

【三七二頁 四行】偈(げ)を終えた羅刹女(らせつにょ)たちは、さらに申し上げました。

「世尊よ。私どもはこの教えを受持・読誦・修行する人々を、身を以て守護いたします。いつも法師が安穩(あんのおん)であるように、諸々の心配や障(さわ)り無いようにいたします。たとえ毒殺されようとしても、その毒はことごとく消して行きます」

### 【羅刹女(らせつにょ)らの決意を釈尊が讚歎】——

【三七二頁 六行】すると釈迦牟尼仏は、羅刹女(らせつにょ)たちにお告げになりました。

「善いかな。善いかな。そなたたちは法華經を受持する法師を守護すると、よくぞ言ってくれました。その功德は計り知れないほど大きいものです。ましてや法華經を信受し、また、經典に花・さまざまなお香・首飾り、旗・天蓋(てんがい)などを供え、音楽を奏(かな)でて、あるいは乳の油による燈明・植物油の燈明・さまざまな香油による燈明など百千種にのぼる燈明を灯して仏を供養する者を守護するならば、その功德はまことに甚大(じんだい)であります」

【三七二頁 終二行】「皐諦(こうたい)をはじめとする羅刹女(らせつにょ)やその家来たちよ。／【『應當(まさ)に是(かく)の如き法師を擁護(おうご)すべし』まさにそなたたちは、法華經を説く法師を守護していくのです」

【三七二頁 終行】こう仰せられて説法は終わりましたが、この『陀羅尼品』を同った六万八千人の人々は、『無生法忍(むしょうぼうにん)』という境地、すなわちこの世は本来ただ一つであるという『空(くう)』の教えを究(きわ)め、現象世界のあらゆる変化に動じない絶対安穩の境地を得ることができたのでした。



### ごしゆふほん 五種不翻

(P278・7行/P198・2行)

仏教經典を中国語に翻訳した人たちは、どうしても翻訳しないほうがよいと判断されたものは、原語の音(おん)に似た漢字を当ててすませ、わざと原語のまま残しておいたのです。これを〈五種不翻(ごしゆふほん)〉とします。

①インドにあって中国にない動植物や伝承の魔物などの名。「迦楼羅・かるら、緊那羅・きんなら」など。②一語に翻訳すると原意が十分に尽くされないもの。「陀羅尼・だらに」など。③神秘的な言葉。秘密の語。「陀羅尼品の神呪」など。④昔からの習慣に従ったもの。「阿耨多羅三藐三菩提・あのかたらさんみゃくさんぼだい」など。⑤翻訳すれば、真の意味を失うもの。「仏陀・菩提」など。

羅刹女(らせつによ)たちが、法華經の敵に対する報復を誓っているようですが、そう見てはいけな  
ないと思います。～ 徹底した寛容を説かれるお釈迦さまが、無条件に「善哉、善哉」とおほめになるはず  
がありません。罰(ばつ)を「あたえてやろう」とはいわず、「得るであろう」と言っています。やはり、自らの罪によって自ら罰せられるという《業・ごう》の原理の通り  
の表現であります。このことをしっかりと理解しなければ、卑俗(ひそく)な見解に陥(おちい)り  
やすいですから、注意が必要だと思ひます。(P321・終行/P234・2行)

## 《<sup>しんがい</sup>患懼のひととき ①》

「罰(ばつ)は誰が与えるのか…。私は人を罰するような、人間と『相対的』な関係にあるものではありません。いうまでもなく自分自身です。自分の作った《業・ごう》が、自分自身のうえに現われてくるのです。やはり、自らの罪によって自ら罰せられるのです」と庭野開祖は説きます。  
—— この庭野開祖の指導をどのように受け止めますか。かみ締めてみましょう。

## 鬼子母神

(P314・1行/P227・6行)

鬼子母というのは、ハーリーティー(訶梨帝・かりてい)という名の鬼女(きじょ)です。500人の子  
供を持っていましたが、大変残酷・邪悪で、王舎城の町へ来ては人の子をとって食べていま  
した。お釈迦さまがそれを教化する方便として、鬼子母の一人の子をお隠しになりました。子煩  
悩の鬼子母は半狂乱になって探しまわりました。そのときお釈迦さまが、「500人もの子  
を持っていてもそのように悲しいのだ。おまえに子どもをとって食べられる親の身になってごら  
ん」とおさとしになりましたので、はじめて非を悟り、すっかり仏教に帰依して、長く安産と  
幼子の守り神になろうという誓願をたてたのでした。

『説法者を惱亂(のうらん)せば 頭(こづ)破れて七分になること阿梨樹(ありじゅ)の枝の如くなら  
ん 父母を殺(しい)する罪 ～ 亦油(またあぶら)を壓(お)す殃(つみ) ～ 斗秤(としょう)をもって  
人を欺誑(ごおう)し 調達(ちやうだつ)が破僧罪(はそうざい)の如く 此の法師を犯さん者は 當(まき)  
に是(かく)の如き殃(つみ)を獲(う)べし』

この総持真言に背(そむ)いて、法華經を説き、実践する人を悩ます者は、その罰として、地に落ちると枝が七  
分八裂(しちぶんはちれつ)に細かく割れる阿梨樹(ありじゅ)の枝のように、頭がバラバラに砕(くだ)けるでありま  
しょう。法の実践者を悩ますこの罪は、両親を殺す大罪と同じであり、油を搾(しぼ)り出す時、石臼(いしうす)にはびこる無  
数の虫たちを殺しながら石臼を引く罪であり、または、人を悩まし、猜疑心(さいぎしん)を起こさせてしまう秤(はかり)や  
計算をごまかす罪、そして提婆達多(だいばだつた)が釈尊を殺害しようとして釈尊教団の和合を乱(みだ)した罪と同  
じ大罪にあたります。法の実践者を害する者は、この大罪を犯し、その罰(ばつ)を自ら受けることになるでしょう。

## 説法者を惱亂する罪

(P319・1行/P232・1行)

法華經の説法者(実践者)を悩ます者の大罪。頭割れ、親殺し、釈尊を殺す大罪と同じ。

## 《<sup>しゆい</sup>思惟のひととき ②》

「法を説き、実践する者を悩ませる罪は、両親を殺し、釈尊を殺そうとした罪と同罪」だと。説かれています。じつは、「法座」での話を他に漏らし、その結果、法を実践しようと決意していた法座での発言者を悩ませ、傷つけるということは残念ながらあるようです。

つまり、『陀羅尼品』でいう説法者を悩乱する罪と、法座での話を他に漏らし秘密を守らない罪は、同罪だと言えます。—— あなたは、このことをどのようにお考えになりますか。



### <妙莊嚴王本事品のあらすじ>

【釈尊が、妙莊嚴王がいた過去世の話をされる】——

【三七三頁 一行】多くの神々が、法華經を実践する者を守護するために総持真言(そうしんごん)を説き、六万八千人の人々が絶対安穩の境地である『無生法忍(むしょうぼうにん)』を得た時、**釈迦牟尼仏**は法会に参集しているすべての聴聞(ちょうもん)の衆に向かって、次のように仰せになりました。

「無量無辺不可思議(ぶかしぎ)阿僧祇劫(あそうぎこう)というはるか遠い昔、**雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゆくおういちぶつ)**という仏がおられました。国は**光明莊嚴(こうみょうしょうごん)**といい、時代の名は**喜見(きけん)**と言いました。その世界に**妙莊嚴(みょうしょうごん)**という一人の王がいました。そして夫人の名は**淨徳(じょうとく)**、息子の二人は**淨蔵(じょうぞう)**、**淨眼(じょうげん)**と言いました」

【三七三頁 六行】『是(こ)の二子(に)大神力・福德・智慧あって、久しく菩薩所行(しよぎょう)の道(どう)を修(しゆ)せり』「この二王子は大神通力を持ち、福德(ぶくとく)・智慧に満ちていました。これは長い間、菩薩行を実践していたことによるものです。そして布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の『六波羅蜜』を完成し、人を正しく導く**方便**に精通(せいとう)し、慈悲喜捨の『四無量心』を具えていました。さらに六波羅蜜を補助する三十七の修行の道にも精通していました」

【三七三頁 終三行】「また、この二人の子は、心を清らかにすることにより煩悩を完全に除いた『**淨三昧(じょうさんまい)**』や、太陽のようにすべてを照らす智慧を持つ『**日星宿三昧(にっしょうしゆくさんまい)**』をはじめ、さまざまな三昧の境地に達していました」

【三七三頁 終行】「その時、**雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゆくおういちぶつ)**は、**妙莊嚴王(みょうしょうごんのう)**を悟りへと導こうとお考えになり、王をはじめ多くの人々の幸せを願う心から『法華經』を説かれることにしました」

【《過去世の話》／淨蔵・淨眼の二王子が母に対して、仏の供養を願う】——

【三七四頁 一行】「そのことを聞いた**淨蔵(じょうぞう)**、**淨眼(じょうげん)**の二王子は母の所へ行き／『十指爪(じっしそしよく)を合せて白(もう)して言(もう)さく』両手を合わせて願い出ました『母上。どうか**雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゆくおういちぶつ)**のみもとへお出かけください。私たちもお供(とも)して、親しく仏さまのお側に罷(まか)り出て、供養・礼拝いたしたいと存じます。なぜならば、

この仏さまは一切の天人(てんにん)や人間のために『法華経』をお説きになろうとされているからです。私たちもその教えを聴聞(ちょうもん)したいと存じます』と願ったのでした」

【三七四頁 五行】「すると母・浄徳(じょうとく)は子どもたちに言いました。『そなたたちの父は、仏法以外の教えに傾倒(けいとう)し、バラモン教を篤(あつ)く信仰しています。ですから父王(ふおう)が仏法を聴聞(ちょうもん)することは、そう容易(たやす)いことではありません。だからこそ、そなたたちから直接父王に申し出て、一緒に仏さまのもとへ行くようお願いしてはどうですか』

【三七四頁 六行】「浄蔵(じょうぞう)と浄眼(じょうげん)の二人の王子は、合掌しながら母に申し上げました。『私たちは仏さまの子であるにもかかわらず、なぜこうして仏教とは違う信仰の家に生まれたのであろう』と嘆きました」

### 【《過去世の話》／父を教化するために奇跡を現わすことを母が提案】——

【三七四頁 八行】「母・浄徳(じょうとく)は子どもたちに言いました。『そのように父を心配するのであれば、／『爲(ため)に神變(じんべん)を現(あら)わすべし』父王(ふおう)が驚くような奇跡を現わしてごらんなさい。それを父王がご覧になれば、頑(かたく)々な心がほぐれ、清浄(じやうじやう)で心穩(こころおだ)やかとなって、私たちが仏さまの御許(みもと)へ行くのをお許しになるでしょう』と」

### 【《過去世の話》／二王子が父の前で奇跡を現わす】——

【三七四頁 終三行】「すると浄蔵と浄眼の二王子は早速(さっそく)、父の所へ行き、父のことを思う心から、様々な奇跡を現わしたのでした」

【三七四頁 終二行】「そして二人は多羅樹(たらじゆ/椰子の木のような高木・高さ約20m)の七倍の高さにまで飛び上がり、／『虚空(こくう)の中に於(おい)て行(ぎやう)・住(ぢ)・坐(ざ)・臥(が)し、身の上より水を出(いだ)し、身の下より火を出(いだ)し』空中を歩いたり、とどまったり、座ったり、横になったりして見せました。そればかりか、頭上から水を吹き出し、そして足先から火を出したかと思うと、今度は反対に頭から火を出し、足先からは水を出しました。また、大空を覆(おお)い尽くすように巨大になったかと思うと、次の瞬間、豆粒のように小さくなりました。そして、空中にパッと姿を現わしたかと思うと、その次には大地に吸い込まれて行きました。まるで水が浸(し)み込むように地中に入って行くのでした。しかし次には地面を歩いて行くのでした。このような数々の奇跡を目にした父王は驚き、／『其(そ)の父の王をして心淨(こころきよ)く信解(しんげ)せしむ』王の心は清浄になって、子たちの神通力を心から素直に認め、感嘆したのでした」

### 【《過去世の話》／二王子の奇跡に父が感動。「師は誰か」と問う】——

【三七五頁 四行】「父王(ふおう)・妙莊嚴王(みょうじやうごんのう)は、王子たちの神通力の偉大さに感激し、これまでに経験したことのない感動と歡喜を覚えました。そして子どもたちに合掌して、思わず口にしました。／『汝等(なんだち)が師は爲(きだ)めて是(こ)れ誰(たれ)ぞ、誰の弟子ぞ』『そなた達の師は一体誰なのか？ 誰から教えを受けているのか？』と声をあげました」

【三七五頁 六行】「浄蔵と浄眼の二王子は答えました。『大王よ。それは雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゅくおうけち ぶつ)さまです。今、あの七宝に輝く菩提樹の下の法座に端座(たんざ)しておられるお方です。その仏さまはこの世の全ての天人や人間のために、広く『法華経』という教えをお説きになられます。その仏さまが私たちの師です。私たちはそのお方の弟子です』」

【三七五頁 終四行】「父王(ふおう)は言いました。『そうであったか。／(『我今亦(われいままた)汝等(なんたら)が師を見たとまつらんと欲す。共俱(とも)に往(ゆ)く可(べ)し』) それでは私もそなたの師にお目にかかってみたい。共に行こうではないか』と仏さまのもとへ行くことを願いました」

### 【《過去世の話》／父の感動を喜び、二王子は出家することを母に懇願】——

【三七五頁 終三行】「それを聞くと、浄蔵と浄眼の二王子は小躍(こおど)りしながら空中から降りてきました。そして母・浄徳(じょうとく)の所へ駆(か)け寄り、合掌しながら申し上げました。『母上。おっしゃられた通り父上に仏さまの偉大さをお分かり頂くことができました。そして父上は、仏の悟りを願う心になりました。私たちは父上を仏道へお導きするという父上にとって極めて大切な一大事をなすことができました。誠に有難うございます。／(『願わくは母、彼(か)の佛の所(みもと)に於て、出家し修道(しゅうどう)せんことを聽(ゆる)されよ』) この上は何卒お願いがございませう。私どもが仏さまの御許(みもと)で出家し、仏道を修めることをどうかお許してください』」

【三七六頁 一行】「浄蔵(じょうぞう)と浄眼(じょうげん)の二王子は重ねてお願いを申し上げました。『どうか私たちが沙門(しゃもん/出家僧)になることをお許してください。／(『優曇波羅(うどんばら)の如く佛に値(あ)いたてまつること復(また)是(こ)れよりも難(かた)し』) 仏さまにお会いできるということは極めて稀(まれ)なことです。それはあたかも三千年に一度しか花を咲かせない優曇波羅華(うどんばらけ)の開花に出会えるような稀有(けう)なことです。この機会を逃せば再び仏さまに出会うことは極めて困難であると言えます。ですからどうか私たちの出家をお許してください』」

【三七六頁 終六行】「すると母・浄徳は二王子に答えました。／(『汝(なんたら)が出家を聽(ゆる)す。所以(ゆえ)は何(いか)ん、佛には値(あ)いたてまつること難(かた)きが故(ゆえ)に』) 『そなた達の出家を許しましょう。仏さまにお会いできることは、極めて難しいことですから・・・』」

### 【《過去世の話》／法華経に出会うことは3千年に一度あるかの稀有(けう)】——

#### 《盲亀浮木(もうき ふうぼく)の譬え》

【三七六頁 終五行】「すると浄蔵と浄眼の二王子は心から喜び、両親に向かって申し上げました。『父上。母上。誠に有難うございます。どうかお二方とも雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゅくおうけち ぶつ)の御許(みもと)に赴(おもむ)き、ご供養をなされて下さい。なぜならば／(『佛には値(あ)いたてまつること得難(えがた)し、優曇波羅華(うどんばらけ)の如く、又一眼(またいちげん)の亀の浮木(うきぎ)の孔(あな)に値(あ)えるか如し』) 仏さまにお会いできるのは極めて稀(まれ)なことであり、それは

三千年に一度咲く優曇波羅華(うとんばらけ)の開花に巡(めぐ)り会うようなものであり、または大海をさまよう浮き木の穴に、一眼(いちげん)片目の亀が顔を偶然に出すような極めて低い確率で生じる稀有(けう)の出来事であります』 — **《盲亀浮木(もつきふぼく)の譬え》**

**【《過去世の話》／二王子は出家を許された後もまた、出家を懇願して決意】**——  
【三七六頁 終二行】『このように稀有(けう)の出来事ですので、こうして今世、仏さまのご在世中に生まれることができ、しかも仏さまにお出あいできることは、誠に幸せなことであります。／《我等、宿福深厚(しゅくふくじんこう)にして佛法に生れ値(あ)えり》』おそらく私どもは前世において善業を積ませて頂いたおかげで、今世、仏さまにお出あいさせて頂くことができたものと存じます。父上よ。母上よ。どうか私達の出家をお許してください。仏さまにお会いすることは極めて困難であります。再びお出あいできることは、なかなか難しいことです。ですから、出家をお許してください』と懇願(こんがん)し、決意を述べたのでした」

【三七七頁 一行】「その時、二王子の熱心な願いを伺っていた王に仕える八万四千人の女官(によかん)たちも、全員が法華経を受持する固い決意ができたのでした」

**【《過去世の話》／二王子と浄徳夫人の徳分を紹介】**——

【三七七頁 二行】「浄眼(じょうげん)菩薩は、『法華三昧』という法華経を完全に体得している境地を遠い過去より具(そな)えていました。また、浄蔵(じょうぞう)菩薩は無量百千万億劫というはるかな昔から、『離諸悪趣(りしよあくしゆ)三昧』というあらゆる悪から離れ、清浄な心を保つ境地を得ていました。それも決して自分の解脱(げだつ)のためでなく、一切衆生を悪道から離れさせたいという心から発したものでした。また王妃である浄徳夫人(じょうとくぶにん)は、『諸仏集(しよぶつじゆ)三昧』という諸仏の教えを完璧(かんぺき)に理解する境地を得ていました。そのために、諸仏の御心(みこころ)の奥にある深遠(しんえん)な教えまでも理解することができたのでした」

**【《過去世の話》／妙莊嚴王が仏の御許(みもと)へ。仏を礼拝】**——

【三七七頁 六行】「さて二王子は、先の神力・方便力によって父王(ふおう)は仏法を信解(しんげ)し、喜んで精進するまでになりました。そのため妙莊嚴王(みょうじょうごんのう)は多くの家臣を引き連れ、また浄徳夫人(ぶにん)は奥御殿(おくごてん)の女官(によかん)や召使いを連れ立ち、そして二王子は四万二千人の民衆を引き連れて雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゆくおうけちぶつ)の御許(みもと)に赴(おもむ)きました。一行は仏さまの御許(みもと)に着くと、額を仏さまのみ足に付けて礼拝し、仏さまの周りを三周して仏徳を讃嘆し、法会(ほうえ)の場に着座しました」

**【《過去世の話》／雲雷音宿王華智仏が妙莊嚴王へ法華経を説く】**——

【三七七頁 終三行】「その時、雲雷音宿王華智仏は、／《王の爲に法を説いて示教利喜(じきょうりき)したもう》』王のためにやさしい教えから順を追って法を諄々(じゆんじゆん)と説かれました。すると王は初めて触れた仏さまの教えに、大いなる歡喜を覚えたのでした」

【三七七頁 終二行】「そこで妙莊嚴王(みょうしょうごんのう)と淨徳夫人(ぶにん)は、仏さまに感謝の供養として首にかけていた高価な真珠の首飾りをバラバラに解き、その真珠を仏さまの頭上に散じました。すると真珠はたちまち虚空(こくう)に昇り、四本の柱を持つ美しい宝の台座となり、その台座には多くの宝と百千万の天の衣が敷き詰められました。そしてその上に仏さまはお座りになり、結跏趺坐(けっかふざ)して端座(たんざ)し、全身からは大光明を放たれたのでした」

【三七八頁 二行】「その尊いお姿を拝した妙莊嚴王は、『何と素晴らしい徳相を具えた仏さまであろうか。このように嚴(おごそ)かで素晴らしい徳相を具(そな)えている方は他にはいない。最高第一の徳相を成就されている』と心から感嘆(かんとん)したのでした」

### 【《過去世の話》／雲雷音宿王華智仏が妙莊嚴王へ授記】——

【三七八頁 三行】「その時、雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゅくおうけちぶつ)は男女の出家・在家の修行者たちに仰(おほ)せになりました。『そなた達よ。妙莊嚴王が今、私に合掌して立っている姿をどう見ますか。この王は私の教えに従って比丘となり、仏と成るべき様々な道を修めて、必ず仏となるであります。その仏の名は娑羅樹王(しゃらじゆおう)と言い、国は大光(だいこう)、時代は大高王(だいこうおう)と申します。娑羅樹王仏の御許(みもと)には、無量の菩薩や声聞などの修行者が居並(いなら)び、その国は平坦で美しい国であります。妙莊嚴王のこれからの精進による功德は、このように素晴らしい功德となって現われるのです』

### 【《過去世の話》／法華經に感動した妙莊嚴王が出家をする】——

【三七八頁 終五行】「妙莊嚴王(みょうしょうごんのう)はただちに王位を弟に譲(ゆず)り、国政を任せました。また王妃と二王子および多くの家臣たちは仏法に帰依し、出家の道を歩むことになりました」

【三七七頁 終四行】「大王は出家し、八万四千年の間、常に一心に『法華經』の教えに即して精進しました。その結果、多くの人々を救い切り、そのうえで何一つ報いを求めないという境地『一切淨功德莊嚴(いっさいじよくどくしょうごん)三昧』を得ることができたのでした」

【三七八頁 終二行】「この三昧を得ると妙莊嚴王は多羅樹(たらじゆ/椰子の木のような高木・高さ約20m)の七倍の高さの虚空(こくう)高くに昇り、そこにとどまりました。そして雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゅくおうけちぶつ)に申し上げたのでした」

### 【《過去世の話》／父王が子に感謝と讚歎。我が家に生まれた因縁を説く】——

【三七八頁 終行】「『世尊よ。私を仏道に引き入れてくれたのはこの二人の王子です。この子たちが様々な神變(じんぺん)・奇跡を現わしてくれたおかげさまで、私は間違った信仰を一変させ、仏法の中に導き入れて安住し、世尊にお目にかかることができました。誠にこの二人の子は、私にとって善い友・善い指導者・善知識であります。もとより私にも宿世(しゅくせ・すくせ)に積んだ善根があればこそ仏さまにお会いすることが出来たのでしょうが、『此の二子は是(こ)れ我が善知識なり、宿世(しゅくせ)の善根を發起(ほっき)して、我を饒益(にょうやく)せんと欲するを爲(もつ)ての故に、

我が家に來生(らいしょう)せり』 この二王子たちは自分の善根(ぜんこん)の芽を出させ、私に豊かな利益(りやく)を与え、私を救うために、我が家に生まれてきてくれたものと思います」

### 【《過去世の話》／この家に生まれた因縁を雲雷音宿王華智仏が証明】——

【三七九頁 四行】「その時、雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゅくおうち ぶつ)は、妙莊嚴王に向かつて仰(おお)せになりました」

【三七九頁 四行】「『その通りです。そなたが言う通りです。／『善根を種(じ)えたるが故に世世(せせ)に善知識を得(じ)』 信仰深い善男子・善女人は前世において善行を行って来たからこそ、幾度(い)くど生まれ変わっても善い友・善い指導者・善知識に出会うことができるのです。そしてその善き友・善き指導者・善知識は人々を仏道へと誘(いざな)い、やさしい教えから順を追って法を説いていき、仏の悟りへと導いていくのであります』と雲雷音宿王華智仏は言われたのでした」

【三七九頁 七行】「『妙莊嚴王よ。／『善知識は是(こ)れ大因縁なり』 善い友・善い指導者・善知識に出会うということは、尊い因縁があったからこそ出会うことができるのです。その教化と指導があるからこそ人々は、仏を見ることもできれば、仏の智慧を得たいと発心(ほっしん)することもできるのです』

【三七九頁 七行】「『大王よ。そなたは子である二王子を、どのようにとらえていますか。じつはこの二人は過去世に於いて、六十五百千万億那由他(なゆた)恒河沙劫(ごうがしゃ じょう)という無数の仏の御許(みもと)で恭敬(くぎょう)・讚歎し、『法華經』をしっかりと受持してきたのでした。それにより、誤った『ものの見方』をして苦しむ衆生を、正しい『ものの見方・正見(しょうけん)』ができるように導くのです。そなたが菩提心を起こすことができたのも、宿世(しゅくせ・すくせ)で修行を積んだ二人の子たちのおかげであるのです』

### 【《過去世の話》／妙莊嚴王が雲雷音宿王華智仏を讚歎】——

【三七九頁 終二行】「それを伺った妙莊嚴王(みょうじょうごんのう)は虚空(こくう)から降(お)り立ち雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゅくおうち ぶつ)を讚嘆したのでした。『如来は誠に稀有(けう)のお方であり、全ての衆生を救う『智慧』を具え、偉大なる『功德』を具え持つお方です。それは仏の徳相としてあらわれておられます。すなわち頭上の肉髻(にっけ)からは光明が発しており、目は長く広く、鮮(あざ)やかな紺青(こんじょう)の色をしておられます。眉間の渦毛(うずげ)は純白で、白碼碯(しろめのう)の月の光のようです。齒は白く隙間がなく綺麗(きれい)に並び、唇(くちびる)は美しい赤色をしている頻婆果(びんば)のようであられます』と讚嘆したのでした」

【三八〇頁 二行】「妙莊嚴王は、雲雷音宿王華智仏の無量百千万億の計り知れない大徳を讚嘆し終えると、仏さまの前に進み出て、一心に合掌して再び申し上げました」

【三八〇頁 四行】「『世尊の大徳は、譬(たと)えようもなく偉大でございます。今までに聞いたことも見たこともない未曾有(みそう)の大徳(だいとく)でございます。そして仏さまがお説きになる法は、甚深微妙(じんじんみみょう)の救いの力を持ち、／『教戒(きょうかい)の所行(しよぎょう)安穩快善(あんおんけぜん)なり』 その教えと戒めの実践は、窮屈(きゆうくつ)に感じることなく、心安らかに実践できます。雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゅくおうち ぶつ)よ。／『我今日(こんにち)より復自(またみ

ずから心行(しんぎょう)に隨(したが)わじ、邪見・憍慢(きょうまん)・瞋恚(しんに)・諸惡の心を生ぜじ』本日より私は、迷いの心に引きずられることはありません。間違った考え・おごり・うぬぼれ・怒り・怨(うら)み、その他もろもろの惡の心を起こしません。このことを固くお誓い申し上げます』と申し上げ、そして仏さまを深く礼拝して法会(ほうえ)の場から退出したのでした」

### 【妙莊嚴王や二王子が今世、誰であるかを釈尊が明かす】——

【三八〇頁 七行】釈迦牟尼仏は聽聞(ちょうもん)の大衆に向かって仰(おお)せになりました。

「そなた達はどのように思いますか。じつはこの妙莊嚴王こそ他でもありません、先の『妙音菩薩品』で妙音菩薩の因縁を私に尋ねた華徳菩薩その人です。また淨徳夫人(じゆんてふじん)は、今、私の前にいる光照莊嚴相(くわうしやうざんさう)菩薩であり、妙莊嚴王とその一族・家臣たちをあわれんでこの世に生まれたのであります。そして、妙莊嚴王の妃(きさき)となったのであります。また二人の王子は、現在の藥王菩薩・藥上菩薩その人です」

【三八〇頁 終二行】「この藥王・藥上の二菩薩は、無量百千万億という無数の仏の御許(みもと)で人々を救う徳行を積み重ね、そして計り知れない甚大な功徳を成就することができたのでした。ですからこの二菩薩の名前を聞いた者は、その者が人間であろうと天上界の人々であろうと、二菩薩の尊い徳分を心から礼拝しなければなりません」

【三八一頁 二行】釈迦牟尼仏が妙莊嚴王の前世の話である『妙莊嚴王本事品』を説かれると、八万四千人という多くの人々は、『遠塵離垢(おんじんりく)して、諸法の中に於て法眼淨(ほうげんじやう)を得たり』煩惱・罪惡から離れることができ、あらゆる出来事の実相を直観的に見通すことができるようになったのでした。



かてい しんこうじっせん しどうてきたちば もの しんこう  
**家庭での信仰実践と指導的立場の者の信仰** (P327・1行/P239・1行)

この品では大変現実的な、身近な問題について説かれています。『家庭における信仰の問題』です。～ つぎに『指導的立場にある人の信仰の問題』です。～ ひろく世に尊敬されている指導的立場の人の信仰は、～ 必ず多くの人々に影響を与えずにはおれないものです。

ぶつじつせいかつ せいしんせいかつ  
**「物質生活」より「精神生活」** (P328・7行/P240・4行)

何の不自由も不足もない王家の子息が出家することは、**〈物質生活より精神生活の安らかさが、はるかに勝っている〉**を語っているのです。～ **〈精神生活の転換〉**という意味です。

しむりょうしん  
**四無量心**

(P333・7行/P244・6行 第2巻P265・2行/P201・1行)

- 【慈】— 人を幸せにしてあげたいと思う心。  
【悲】— 人の苦しみを抜いてあげたいと思う心。  
【喜】— 人の喜びを共に喜ぶ心。  
【捨】— 人に施した恩も、人から受けた害や怨(あだ)も忘れ、一切の報いを忘れる心。

じんべん  
**神変とは**

(P343・1行/P252・2行)

この神変(じんべん)というのは、**〈子どもたちの生活態度の、びっくりするような変わり方〉**を意味するのです。そのような現実を見れば、どんな頑固な父でも、必ず心がほぐれてくるはずで

(P345・3行/P254・3行)

- 【空中を歩き、座り、寝る】⇒仏法によって『空』を悟れば、自由自在になる。  
【頭や足から、水・火を噴き出す】⇒『一念三千』。己の一念で現象は変わる。  
「三界は唯心の所現」と同義。  
【虚空を覆う巨大。次に豆粒のように小さく】⇒『人間の本質と現実』の両面を知る。  
本仏と一体なる。一方、自分は小さな人間。  
【空中で消滅。忽然と地上に現われる】⇒『空』を知るだけでなく、『現実』を踏まえる。  
現実を踏まえて生活を正していく。  
【地に入ること水の如く、水を歩くこと地の如く】⇒仏法を悟った者は、人を自由自在に教化。

こむ おや がっしょう  
**子に向かって親が合掌**

(P348・3行/P256・6行)

『時に父～合掌して子に向かって言いわく』 (三七五頁 四行)

父は(子どもたちの神通力の偉大さに感動して)～合掌して子どもたちに尋ねました。

父が子に向かって合掌したことに、よく注目しなければなりません。～それにしても、子に対して手を合わせるというのはなかなか出来ることではありません。誠に尊い光景であります。

しゆい  
**《愚惟のひととき ③》**

「子に対して手を合わせるというのはなかなかできることではありません」と庭野開祖は指摘します。—— 子に対して手を合わせるのみならず、配偶者に対して手を合わせる。目下の人に対して手を合わせる。このことについて考えを深めたいと思います。  
あなたは如何でしょうか? かみ締めてみましょう。

理想論だけでは世は救えない

(P351・終4行/P259・7行)

理想論ばかりでは世の全ての人を救うことはできません。まず『方便』をもって教えに引き寄せなければならぬ人が、たくさんあるのです。むしろそういう人の方が多いでしょう。

～ インテリの人にしても、理論と同時に現証(げんしょう)を見せられれば、ますます強くその教えに引き付けられるでしょう。まして、一般の人の関心と呼ぶには、何よりも現実の証拠を見せることが必要です。

一眼の亀の浮木の孔に値えるが如し

(P359・終5行/P265・終3行)

「盲亀(もうき)の浮木(うぼく)、優曇華(うどんげ)の花咲くに会う思い…」

示教利喜

(P366・4行/P271・4行)

【示・じ】 教えのあらましを示すこと。

【教・きょう】 理解の準備ができたなら、もう少し詳しく教えの意味を説く。

【利・り】 教えを実践して得られる功德を説く。実践させて利益(りやく)を味あわせる。

【喜・き】 教えを受持することに喜びを感じ、生きがいを覚える。

因縁あればこそ

(P378・4行/P281・4行)

ましてや父母・兄弟として生まれ合わせたり、(夫婦・めおと/となったり)仲の良い友達となったり、あるいは一緒に仕事をしたり、善知識として自分を精神的に導き、人格完成へと誘(いざな)ってくれる人に会うことは、並々ならぬ因縁があればこそです。いわゆる大因縁であります。それを思えば、父母・兄弟・親類・友人・師弟・同僚等々、親しく接する人々、さらには同信の仲間を決して疎(おろそ)かにしてはならないという仏さまの教えが、しみじみと納得できるのであります。

《思惟のひととき ④》

釈尊は「前世において善行を行って来たからこそ、幾度生まれ変わっても善い友・善い指導者・善知識に出会うことができる (『善根を種(じ)えたるが故に世世(せせ)に善知識を得(じ)』)」(三七九頁 五行)。また「尊い因縁があったからこそ出会うことができるのです『善知識は是(こ)れ大因縁なり』(三七九頁 七行)」と説かれています。

— 今世、庭野開祖、庭野会長と結縁(けちえん)することのできた自分自身の因縁を、あなたはどのように受け止めていますか? かみ締めてみましょう。

## 《<sup>しゆい</sup>思惟のひととき ⑤》

並々ならぬ因縁、〈大因縁〉があればこそ、親子・夫婦・兄弟・同信の仲間・同僚・友人となったのだと庭野開祖は説明しています。この〈大因縁〉によって結ばれたことを、あなたはどのように受け止めますか？ かみ締めてみましょう。

### きせき いみ 奇跡の意味

(P390・2行/P291・5行)

(二王子が奇跡の現象を現したことは) 仏法を学び、信することによって、人格が一変し、したがって日常の行ないがすっかり変わったことを意味しているのです。

### じっしょう だいいち 実証によるみちびきが第一

(P390・終4行/P291・終5行)

人を仏の教えに導くには、相手に応じて平易に、あるいは専門的に～ 納得のいくように説明してあげることが必要です。しかし、それよりも手っとり早いのは身をもってする実証です。自分自身が仏法を信じ行なうことになってからこのように変わったのだという生きた事実を見せることが第一です。～ 日夜一緒に生活している家庭内の者には、日常の一挙一動(いっきょいちどう)に現われる小さな変化も敏感に感じとられるものです。

### かぞく 家族をみちびくには

(P392・6行/P292・終3行)

家庭内の人を仏の教えに導くには、いくら教えの内容を説明し、理論的に納得させても、本人の生活態度がかわらない限り、なかなか効果のあがるものではありません。～ 家族を導くことは、やさしいようで一番難しいことだと言えましょう。

## 《<sup>しゆい</sup>思惟のひととき ⑥》

家族を導くことは一番難しいこと。日常の一挙一動(いっきょいちどう)に現われる小さな変化を敏感に感じとられる家族に対して、家庭内での法の実践は難しいことです。と庭野開祖は説きます。―― では私は一挙一動に小さな変化でも現われるような家庭実践、難しいと言われる法の実践をしているのでしょうか。または、これから何をすることが大切でしょうか。振り返ってみましょう。

### こころ しゅっけ 心の出家

(P396・終行/P295・終3行)

妙莊嚴王・夫人・二王子その他が出家したことは、仏法によって煩惱から解脱したことを出家という行動に象徴してあるのです。いわゆる〈心の出家〉です。

しどうてきたちば ひと しんこう  
**指導的立場の人の信仰**

(P397・6行/P296・2行)

指導的立場にある人が正しい信仰にはいった場合、その影響がどれほど大きなものであるか、  
～ その人の人格は必ず多くの部下の人たちに良い影響を与えます。

**まとめ**

(P399・6行/P297・8行)

【妙莊嚴王】⇒権勢者・指導者の真理（妙法）に対する態度の模範。

【二王子】⇒子の親に対する信仰開眼の方法を示す。

【浄徳夫人】⇒真理に対して進歩的な者と保守的な者との中間に立つ者の態度の手本。

《<sup>しゆい</sup>思惟のふいかえり まとめ》

今日の『陀羅尼品第二十六』と『妙莊嚴王本事品第二十七』の学びを通して、何を学び取ったか？（または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか？） 振り返ってみましょう。

合 掌